

「命も支えてくれる大切な税」

須賀川市立西袋中学校 一年 古和田 来々

私は今、とっても健康体である。だが産まれた時はまだ三十一週五日、妊娠月数でいうと八か月後半だった。私がお腹に入っている時に東日本大震災が起き、切迫早産だった母は避難先の知らない土地の病院で入院していましたが、破水し千七百三十六グラムの小さな私を出産した。肺が完全に出来ていなかったため、すぐにNICU（新生児集中治療室）で人工呼吸器をつけられ、一か月半もの間そこで過ごした。医師から母に説明された言葉は、

「障害が何かしら残るかも知れない。他の子よりもゆっくと成長すると思うので見守るように。」

などといった不安な内容だったという。もし私が母の状況になったら耐えられるだろうかと思った。そんなつらい状況の中でも病院の事務の人から治療費の説明があった。それは高額医療費というものである。本来なら十数万円は治療代にかかっているものが、税金に支えられたのだ。どのような税金なのか調べてみると、乳幼児医療費助成制度というものだった。この制度から助成されている金額の2割が国民から集められた税金で補われていることが分かった。この乳幼児医療費助成制度は公的医療保険制度の一つだということも分かった。先進国であるアメリカでは日本とは違い、医療費を払うことも間々ならず、病院にかかれぬという人まで増えているのが現状である。日本の制度がいかに素晴らしいかと思うと同時に、みんなが払っている税金によって平等な医療を受けられることがとてもありがたい国であると感じた。

今、世の中では様々な病気によって入院、治療を受けている人がいる。その一人ひとりがより良い治療を受け、病気が改善し、笑顔で大切な人と、大切な家族と過ごせる人が増えるなら私は喜んで税金を納めようと思う。

私は今、とても健康だ。何の障害も残ることもなく、毎日テニスをし外でかけ回るこ

とができている。当たり前に見える生活が送れるのは、医師や看護師、父や母のおかげ、そして税の制度が助けてくれたことも大きな一つだ。

これから私は一歩ずつ大人になるための階段を登っていく。その中で様々な税金に出会うことになるだろう。その時に自信を持って大切な税であることを伝えられる人になりたいと思う。